

## 2025年5月の総評に代えて

○林 桂 ○

● azusa ● (京都府 23歳)

手を振ってバンド解散する立夏

【評】プロのバンドではなく、アマチュアのバンドだろう。卒業や転職などで、バンド活動に一区切り付ける。そのコンサート。過度の思い入れのない「手を振って」がどこか爽やか。「立夏」も効果的。

● 林 みき ● (東京都 48歳)

指切りの有効期限 夏祓

【評】子どもの頃の指切りだろう。「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます」が約束の言葉。「拳万」「針千本」と約束を破ったときの厳しいペナルティを課しながら、その約束の有効期限について考えることはなかった。思いの中では一生くらいの気持ちではいただろう。その約束から遙か時間を隔てて、約束の有効期限を考える。多くはたわいないものであっても、時効にはなっていないかもしけな

い。「夏祓」との取り合わせが、なんとも厳かでユーモラス。忘れてしまった約束や破ったままの約束の罪も、ここで一気に祓ってしまおうという魂胆であろう。

● 加那屋こあ ●（東京都 53歳）

波  
鏡  
今朝の悲しみ  
夏薊

【評】脚韻「み」を踏みながら行を跨いでいる。かつ、「起承転結」の構造を意識して四行に書かれている。「転」の「今朝の悲しみ」が効いている。一編に方向性を与えていた。「夏薊」の「結」も、「波」「鏡」と遠く呼応する。

● ムクロジ ●（群馬県 17歳）

短夜の本におさまる栞紐

【評】栞紐を本に納めるのは、読了か読書の中斷を意味しているだろう。読書に相応しい「夜長」ではなく、「短夜」である。

● 奥井 健太 ● (滋賀県 22歳)

霧吹きにサボテン育つタワーです

【評】タワーはタワーマンションの一室をいうのだろうか。サボテンの水分を霧吹きで補いながら、育てている。人工的な環境の中で、かつ人工的な育てられ方をするサボテン。時代の一典型を見ているようである。

● 塩本抄 ● (石川県 37歳)

下り坂ゆけばあらゆる躑躅から、  
まひるま、蕊を向けられている

【評】坂の両脇に植栽された躑躅の花。躑躅の花は上を向いて咲いているので、その花の蕊はすべて「作者」に向けられている。読点で挟まれた「まひるま」が、陰りのない蕊の姿をありありと想像させる。巧みな修辞だ。

● 深谷 健 ● (埼玉県 26歳)

春光のいれものめいている校庭

【評】校庭は塀に囲まれているのが常だ

から、それを「いれものめいている」と見るのは不思議ではない。ただ、この「いれものめいて」で、そこに外から隔離され守られている子ども達の姿も連想させられる。

● 石村　まい ●（兵庫県 26歳）

白ぶどうの部屋が一室あいている  
岬のように夜をねむれば

【評】「白ぶどうの部屋」の意味を読み切れない。ホテルや旅館の部屋の名前か、単に白ぶどうが置かれている部屋なのか。「岬のように」は「ねむれば」にかかるので、眠りの喩に違いないが、岬のような眠りの意味が判然としない。眠りから覚めると（あるいは眠ろうとする）、たぶん隣室の白ぶどうの部屋が空室になっているということだろうか。分からぬことだらけなのだが、この謎めいた部分も含めて、魅了されている。

● 松浦 やも ●（東京都 17歳）

はつなつの  
空腹のあるきびしさに  
折畳み日傘やわらかく  
反る

【評】「空腹のあるきびしさに」の一行が、作品に奥行きを与えていている。青年にくる健康的な空腹感と読むのが一番かもしれないが、この一行で、夏の街頭風景が、青年には厳しいものに見えていることを知る。

●自才 ショウ●(富山県 65歳)

昆虫採集する為  
南太平洋の島へ  
行くことにした  
自分に  
途方に暮れている

【評】流石に南太平洋の島へ昆虫採集へ行こうなどと考えたことはないが、自分の後先を考えない行動計画に、身うごきできず「途方に暮れ」たことはある。多かれ少なかれ、誰にもあることだろう。それをここまでスケールで書かれると笑いに転化する。この笑いで救われるのは、私だけではないだろう。

● 川上 真央 ● ( 東京都 18 歳 )

星空のよう に瞳は  
傷ついて  
テディベアまだ  
抱かれるかたち

【評】「星空」と「瞳」の組み合わせとなれば、「星空」は「瞳」の輝きの比喩かと早合点してしまいそうだが、「傷ついて」である。「瞳」の「傷」の喻である。テディベアを抱きながら育ってきたのだ。そのテディベアには長年の抱き癖がついたままである。過渡期を迎えた傷つきやすい少女期の巧まざる表現に敬服。

● 池田 彩乃 ● ( 青森県 35 歳 )

泡に見る生まれて消える愉しみよ

【評】「淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし」(方丈記)のごとく、泡は儚いもののたとえが定番である。作者はそれを「愉しみよ」と価値転倒してみせる。見事。

● 背腹 颯太 ● ( 北海道 21 歳 )

消火器が不吉で電気を点けて寝る

【評】幼児体験として誰もが持つもののように。消火器に限らないが、日常にある見慣れたものが突然不気味なものに見えてくる。特に夜闇の中では、一層不気味だ。思えば、このような体験は子どもに限ったものではないのだろう。

● 広瀬 心二郎 ● ( 埼玉県 75 歳 )

水のにおいがするねと  
妻が目を覚ます  
武藏野の五月

【評】郊外に住む老夫婦の会話。静かな生活ぶりがうかがえる。「水のにおいがするね」が秀抜。長年連れ添った夫婦の機微が書かれている。

● 五十嵐武月 ● ( 北海道 21 歳 )

本当は誰も好きじゃない君の  
ステッカーまみれの  
ノートパソコン

【評】ノートパソコンに様々なステッカーを貼っている友人。それは人間嫌いのバリアのようなものだと作者は感得する。ステッカーは、自身のパソコン世界を封印する、言わば護符のようなものなのだろう。

● 牧角うら ●（東京都 29歳）

磨かれた孤独のかたち  
八朔を割れば  
まぶしい真昼のきいろ

【評】八朔を「磨かれた孤独のかたち」という。割れば孤独の内実が鮮やかに広がる。「真昼の」の挿入句がイメージを広げる働きをする。

● 海沢ひかり ●（静岡県 31歳）

初夏のプリクラ帳に君はいて

【評】初夏のプリクラに一緒におさまたった君は今はいない。「君はいて」は現在の君の不在を確認する言葉だ。若ければ若いほど時間が過ぎるのも早く感じられるだろう。

● 秋毫 ● ( 宮城県 19 歳 )

空よりも  
そこに浮いてる雲が好き  
母親が好き  
菓子パンが嫌い

【評】好きな「雲」と嫌いな「菓子パン」に  
挟まれた「母親が好き」の妙。朗らかなマ  
ザーコンプレックス宣言の赴き。菓子パ  
ン嫌いの子どもに育つには、愛情深い母  
親の食育があったに違いない。